2月11日(土)20:00～ 東京演劇集団風公演

アンコール公演

バリアフリー演劇

Touch

～孤独から愛へ ORPHANS

元気づけてやろう！

アメリカのアパートの一室に暮らす、両親を知らずふたりきりで生活する兄弟。乱暴者の兄と家から一歩も外に出ない弟のもとに「お前らデッド・エンド・キッドだろう！」と突如現れた、謎の酔っぱらいハロルド。兄弟は男を誘拐しようと企みますが失敗。男３人の奇妙な共同生活が始まってしまいます。ハロルドに心を開き、自分の世界を広げていく弟。しかし、ハロルドに触れられることを拒み続け、ある日、家を飛び出してしまう兄。見終わると、心がひりひりとしながらも元気満点になる、そして、もう一回見たくなる、そんな作品との出会いの始まりです。

作　ライル・ケスラー　　演出　浅野佳成

バリアフリー演劇とは　見えない人も、聞こえない人も、普段劇場から足が遠のいている方も、誰もが一緒に演劇を楽しんでほしい、そう願って上演しています。字幕・音声ガイド・手話通訳は舞台演出の一部となり、俳優と絡み合いながら、舞台上の動きやセリフを伝えます。開演前には、舞台の裏側や仕組みに自由に触れるバックステージツアー、道具や衣装も紹介する舞台説明も行います。

枠組みを破る中で生まれる共鳴

東京演劇集団風バリアフリー部門総合監修：尾上浩二

「障害当事者の立場からバリアフリー演劇の意義を伝える」という役割で劇団風のユニバーサル公演に同行しましたが、出会った子どもたちからエネルギーをもらえた貴重な時間となりました。

劇の終盤、子どもも舞台に上がってのカーテンコールのシーンでは感極まって泣く子もいます。それは決して偶然ではなく、このユニバーサル公演の特色がもたらしたものです。手話歌を一緒に歌う、開演前の舞台に上がり道具のポンプを動かしてみる…、子どもたちにとっては主体的な関わりを持った大切な公演なのです。

バリアフリー演劇は、様々な障害がある者をはじめ多様な観客に広く開かれています。そうしたバリアフリー演劇の持つ解放感が、「演じる→観る」といった一方通行ではない、双方向的な関わりを生み出します。枠組みが破られることで、共鳴が生まれます。バリアフリー演劇は文化芸術が本来持っている力を観る者に気づかせ、そして、そのことで子どもたちの力も覚醒されるのです。

公演の後、私も舞台に上がり、日々の生活の様子も交えてバリアフリー演劇の意味を子ども達に話しました。私のすぐ側に座り、かぶりつくように話を聴く子もいます。ずっと私の腕にしがみつく子もいます。

質問の時間では、時間が足りなくなるくらい、次から次に手が上がります。「車いすに乗っていてパンクしたらどうするのですか？」「ひっくり返ったことはありますか？」と、感じた疑問を率直にぶつけてくれるのが心地よく感じました。中には「車いすに乗って得したことはありますか？」という質問があり、本好きの私は「本屋で立ち読みじゃないから、いくらでも読めること！」と答えたりもしました。

どの学校でも注目の的だったのがラッピングバスです。車いすでの移動を考えると、ターミナル駅から学校にたどり着くまでが一苦労なのです。そこで、大活躍したのがラッピングバスです。公演を終えて私たちがラッピングバスに乗り込むところを、子どもたちは最後まで見届けて見送ってくれました。

今後、このラッピングバスを伴ったツアーが全国各地で展開されれば、学校は、社会は大きく変わっていくに違いない、そうした手応えを感じたユニバーサル公演でした。

2月10日(金)20:00～　インクルーシブ劇団　夢屋(自立生活夢宙センター)

妖怪バリアーをやっつけろ！

インクルーシブ劇団　夢屋(自立生活夢宙センター)とは

「平下兄弟」がモデルの「妖怪バリアーをやっつけろ！」絵本発行とともに、社会のバリア(階段・心など)から生まれる差別や偏見をなくすために、自立生活夢宙センターの仲間たちが結集し、この劇団は、2010年4月に結成されました。小角元哉が脚本を作成し、「当事者性を大切に」をキーワードに、障害当事者5名が所属し、稽古や公演に取り組んでいます。障害が重く発語が難しい人は、身振り、手ぶり、表情などをいかした役作りなど、その人に合わせた演出を行なっています。障害の有無にかかわらず、お互いを認め尊重し合い、生きることができる社会を目指して活動しています。当日は、「妖怪バリアーをやっつけろ！」を上演します。

脚本・演出：小角元哉　出演：平下泰幸、林毅、堀みのり、登裕樹、溝口広知、堀旭